



桐間紗路の妊娠・出産

「ふわあ……送ってくれて、ありがとうございまふう」
「ふふう……どういたしまして……お礼は、そうだねえ……」
「だらしなくベッドに無防備に横たわるのは桐間紗路ちゃん。
お嬢様学校に通っている特待生。だけど、
お家はちよつと貧しくて、ブルール・ド・ラパンというお店で
バイトしている。」

「ふわあ」
「きっかけは、可愛い女の子目当てに喫茶店
をはしごしていた時だった。
ココロビ屋さんのあと、
シヤロちゃん目当てで
お店に居座っていた時に、
いつもと様子が違うことに気づいた。
具体的には、いつもはしない凡ミスを
何度もしていたことだ。」

「後日調べてみると、ボクの吐く息に
含まれるコーヒーのせいらしいとわかった。」

「コーヒーを飲むとまるで
酔ったかのようになり、
フテシヤフニヤが上つて、
今、この状態がそうだった。」

「それから、
モノにできるチャンス
ずつと伺っていた。」

ポッ

「いろいろ苦心して、ボクは介抱する体裁で
シヤロちゃんのお家に訪問する
ことに成功したわけである。」

「きついでしよう？パンツも脱ぐと楽になるよ♡」
「あっ……ありがとうございまふう」

大事な秘部を男のボクの眼前にさらしても全く気にすることはなく、シヤロちゃんは、ボクにされるがままだ。

あっ♡

すでにボクの股間はパンパンに張り詰めで、射精寸前まで勃起している。

「さて……と」

「ふあ？なにをするの？」
おもむろに全裸になりだすボクを見て当然の質問だ。

「とっっても気持ちのいいマッサージを
してあげるよ♡
今日の疲れなんか、すぐに忘れちゃう
くらいね♡」

ペニスをポロリとむき出す。
天井に向けて痛いくらいに
突き立っていて、さきばしりの
汁が垂れている。

「そうなんらあ……んっ♡」

オマシヨにペニスの先端をあてがっても、
何の抵抗もない。
「いくよあ……はあはあ……それっー」

軽い膜の抵抗を先端に感じたが、ボクのペニスはするつと
シヤロちゃんの膣内に滑り込んでいった。

スルルッ

「はあっ……ち、力を抜いてねっ!」
「んっはあああんっ♡
これえ、なんれすかあ?」

「んひっ♡きっつきっつオマン」が
チンチン締め付けてきてる!」

「おちんちんがはいってるのお?」
「っつい素直に感想を言ったせいで、
マッサージではないことは明白。
だけど、判断力が低下している
せいか、シャロちゃんが
気にしている様子はない。」

「そ、そうだよっ!
シャロちゃんのオマン」に
チンチン入っちやってるんだよ!」
「そうなんらあ……んっ」

「き、気持ちいいっ!」
「んっよくわかんない……!」

「じゃあわかるように
動いてあげるからねっ!」

パ
ン
ジ
ン
ジ
ン

ズ
ズ
ン

腰を動かして、ペニスをさらに
膣内に埋め込んでいく
「んあっ♡ ふああん!」
艶めかしい声をあげて、
ボクのペニスを膣内で感じている。

「気持ちいいんだねっ!
あっ……もう出そうっ!!
お腹の中に、熱いの注いで
あげちゃうから、受け取って!!」

「んっ……ふあっ♡
はあんっ、ひっ♡」

ボクは射精をするために、腰の動きを早める。

「はああ、はああっ！射精すうっ！
シャロちゃんのオマンコのなかにっ……
子種送り込むっ！」

本能の赴くまま精液を送り込む。

「あっ……熱いのお腹にきたあ♡
中にひろがっできてるう……ふあああ」

「孕めっ！ボクの赤ちゃん孕む
くらいにっ……子宮にザーメン貯めこんでっ！！」

思っている本音を精液のたぎりと一緒に
子宮にぶつけた。

「ふあっ！あ、赤ちゃん？
それってえ……でもお
気持よくてえ……
よくわからなあい♡」

「今はわからなくたっていいよお……はああ、
結果はずーっとおとでっ……んっ！分かるんだからあ♡」

シャロちゃんはされるがままに
素直にボクの射精を受け止め続けるのだった。

ドレムリッ
ドレムリッ
ドレムリッ

ズブッ

あっ？

♡♡

「あああつ……いつとばいつ……でたよお♡はあはあ……」
「ふあつ……はあんつ♡」
引き抜いて、結合部分をしっかりと見つめてみると、奥から精液が溢れだしてきた。

「シャロちゃんのはじめて、もらっちゃったねえ♡」

男のものを始めて受け入れた証、破瓜の血が精液と入り混じって流れ出ていた。

「もう、こうなったらシャロちゃんをボクの恋人にしちゃってもいいよねえ？」
「はい……びとお？」

「そうだよお、いいよねっ!!」
「いいれすよお……ふにゃ……」

「しっかりと聞いたよお……今日から僕たち恋人同士だね……んふふっ!!」

「んっ……」

いつものまにかシャロちゃんはかわいい寝息を立てていた。

「ふふっ……これからが楽しみだなあ……今日には十分満足したよ。じゃあ……またね」

ゴポッ
んぱッ

これからこのことを考えると楽しみで仕方ない。次に逢う時のことを想像をふくらませながら、今日のところはシャロちゃんの寝顔に別れを告げた。

「おおっ……ほごおおお♡ んっおおお♡」
「はあっ！身体はおチンポを……今までの快楽をよーく覚えてるようだね？」
「んっ……オマンコがキユって痛いくらいに、チンポ締め付けてきてるよ♡」
「んあっ……こんなの……いやらあ……ひやあ」
「シヤロちゃんの嫌がる声を聞きながら容赦なく射精！
お腹の中に精液を解き放つ。」

「ああとあっ……あつたかあい精液がお腹の中に入ってくるのわかるかい？」
「おおっ……ほおお♡ こんなのおだめなのにい……」
「身体が悦んでりゅう……ふうふう……ぐううううう♡」

おっ♡

ほ、おお……

ぐんぐんぐんぐん

ぐんぐんぐんぐん

勝私の手反意とは無関係に身体は
知らないのし……身体がしつかりと覚えてる……
下半身の異物が……キツクつと震えだすと……
手が伝わるのを締め付けるのです。
下半身に浸るのも溢れだし、
下半身の性は押し流されるように、
消えていきましただけ。

「あっ……ああ……」

「はあはあ……今日もまた、たっつぷりと

子種をシヤロちゃんの中に送り込めたよお♡」

「ご、ごんなに気持ちいいのお……」

「んふふう……よかつただらう？これで終わりじゃないよお……」

「もうっ……にげられにやい♡もうっとお……もうっつてえ」

完全にコーヒーが抜け切れてはいはないのか、
身体のテンションに引きずられて、思考の方も
すっかりエツチに順応したみたいだ♡

んっ

フっ

フェルッ

男の人に抵抗しようとする意思もすっかり
消え失せてしまった。
このままずっと浸っていたい……

快楽を喜んで受け入れる身体に
心のほうを合わせてしまえばいい……
そうすれば幸せになれるだらう……

そう思うのに、時間はかかりませんでした。

あま

「んっ……学校に、遅れちゃうからっ！いい、今はもうやめてくださっ！！ひんっ……んっ♡」
「大丈夫っ、も、もう少しで……でるからねっ……ああと♡」
「昨日、一晩結合してそのまま、おうちにお泊り。
起きてみたら、登校直前の制服姿のシヤロがいたので、
ムラムラっして襲いかかってしまった。」

「あぁっ……もうすぐうっ……でるからっ！！
んっ……ふうっ！ぐふう♡
寝ているうちに作られたボクの精子、
たっぷり子宮に溜め込んでいつて！」
「ひんっ！！そ、そんなの……だめえ」

「寂しくないように、ボクのこと学校で
考えっぱなしになるようにっ！！」

「ひん……ひんやっ……あぁあぁっ！！」

「溜まった精液を絞りだすように
一心不乱に腰を打ち付ける。」



「アイッ……くっくっくっくっ！ 子宮にっ子種っ！流しっむよおっ♡」
「うっむむむむ……うっくっくっくっ」

最奥にペニスを押し込み、何も考えずに
身体の命じるままに精液を吐き出す。
たちまちシャロの膣内に精液が注ぎ込まれていく。
「んんっっ！！ うっ……ふっ……くっ」

女としての本能か、膣はぎゅっうっつと収縮し
ペニスをきつく締め付け、さらに精液を
吐き出させようとしていた。

「んおっ！オマンコビクビクしてるよおっ
シャロちゃんも感じてるんだねー」

ド
ビ
ッ

ビ
ッ
ッ
ッ

ビ
ッ
ッ

「ひっ……いやあ……んっ……こんなのお……
気持ちっ、いいよお！
だめっ……学校に……いかなきゃあ……」

朝から女の悦び感じて頭が真っ白に
何もかも忘れて快感だけに没頭したくなる……
しかし僅かに残る理性がそれを拒むのだった

「おはようー！シャロー！」

「お、おはようー！ございます！ リゼ先ぱい……あっー！」

「ん？どうした……ちよつとふらふらしてないか？」

「い、いえ、昨日はちよつとバイトが忙しくて……そのせいかも？あ、あはは」

「そうか？無理はするなよ？」

「は、はいっ……！」

（ううう……早速アソコから溢れだしている……んんん……）

今頃……マスコに注いだ精液は、

溢れだして、パンツにシミを作り、足を伝っていることだろう。

ボクに朝一で犯されたという事実が

今日一日ずーっと彼女の意識の片隅を支配し続けるんだ♡

満足したボクは彼女の匂いのするベッドで再び眠りについた。

お客さんの姿もまばらな時間帯、とあることを実行しようとして、

「ふっ!!」

「なにをさせようとしているか気づいたシヤロは、軽い悲鳴を上げた。が、ボクはそれにかまわず、

「オチンチン啞えて! ほらほら、ほかの人に

気づかれないうちに、すぐ射精しちゃうからさ!」

「んむっ……はむっ、ちゅむ……くむっ」

「観念したかのようにシヤロは口を開け、ペニスをちゅばちゅば吸い始めた。

「おら……この誰に見られるかもわからない緊張感の中でのフェラ……」

「すごく、興奮して気持ちいいッ!! ふはあ♥」

「んっ……ちゅもっ! むむっ」

おいっ

ッ

ススッ

ススッ

「シヤロちゃん、積極的い……ほおお♥

で、出るう♥お口の中のほうがいいよねっ

「ふあ、ふあい……んぶっ……ずぶう」

「よおし、いくうっ!! お口でッ! お口のなかで受け止めてっ!!」

「いいよお……そのままお口は開きっぱなしで♡」
「んあっ……はあ、はあ、ま、まられすかあ……」

口の中にボクの精液がいつぱに溜まっつらっつ、
真っ白に染め上げている。

ハァ……

「いい眺めだよお……シャロちゃんのお口の中、
ボクの新鮮ザーメンでいっぱい♡」
「んっ……はあはあ やらあ……」
涙ぐみながらも、懸命に口は開きっぱなし。

「舌をうごかして、はら、レロレロお♡」
「ふあ……レロ……レロお、んっ!!」
精液が練り動き、口の中で
いやらしくかき混ぜっつていった。

「全部きちんと飲めたかな？お口の中見せて……」
「ふあい……んあ」と

大きく開いた口の中には、すっかり精液が消え去っていた。

ふあ

「おお、すごい！すっかりキレイになったねえ……」
舌がはつきり見えるよ」

「で、これで……もういいでぶがあ？」
「んっ……満足満足！
お仕事頑張ってたね！」
「ふあい……で、では失礼しますう……」

ふらふらした足取りでシヤロは厨房のほうに
引き下がっていった。だが、再び現れた時には、
多少のぎこちなさを残しながらも
愛想笑いを取り戻していたのだった。

「あ〜……そっすう……もっつとペロペロしてっー」
「んっ……レロレロ……んちゅ……にゅむう」
「シャロにフエラをさせながら、ボクは
膣の中に指を差し入れた。」

「じめんねえオチンチンではオマンコ」
「気持ちよくさせられなくって」
「……んっ、ふむう……」

「でも仕方ないよねっ!!」
「だって、お腹にはボクたちの大切な
赤ちゃんがいるんだからさー!」

ボクという言葉聞いてシャロの
身体がビクンツと硬直する。
妊娠が判明したのはごく最近。

「気持ちよ〜くなるだけなら、
ボクの指ですてあげられる。
ほ〜らあ、ここがいいんだろっつー!」

ちよつと「リツと固くなりっいる。
ところを優しく撫でるようにする。

「ふっ……っ!!んん〜♡
らめえ……はんん!」

フモッ
ヌモッ

「すぞおい……お潮吹いてきたねえ」
「んっ……ふうっ♡……っ!!ふむううう♡」
「このままイっつちやおうか、あ、でも、母体に負担をかけると
赤ちゃんにも影響があるかな？」

ピタッと指の動きを止める。

「あっ……そ、そんな」
「あれ？もっとしてほしい？」
「っ!!そ、そんなことはあ……はあ、あっ」

アッ

アッ

アッ♡

ピッ
ピッ
ピッ

「イかせてあげられないけど、
寸止めなら何度でもしてあげるよ♡」
「あっ……っ♡ はああっ……
っくうううっ！」

絶頂の寸前に寸止め、
身体が落ち着くのを待って、
指でGスポットを撫で回し、
再びイきそうになると止める。

「んっ……ふぎいっ♡んっ……くううう」
「何度も何度も、絶妙のタイミングで
イかないように繰り返す。」

「ほおお……んっぽおお♡
も、もうイかせてえ……」
「あはあ……ついに懇願きちやっただねえ♡」

「きゅらっつと痛いくらいに指を締め付けて、膣は痙攣寸前だ。
「ごめんねえ、まあ精液注ぎ込まなきゃだいたいじょうぶかな？
ボクとシャロちゃんの子供だもの
このくらいじゃ全平気だよね♡
「いつていいよ！気持よくイかせてあげるっ！」
寸止めせずに最後まで指を動かして、絶頂へ到達させる。」

「あひらい♡いぐらイツぐらうららん♡」
「シラフなのに、まるでコーヒハイの
ときのようなとろけた笑顔を披露してくれた。
「ママになるっていうのに、快楽には勝てなかつたね♡
子供がお腹にいても、我慢することなく
いっぱい気持ちいいことしていいわね♡」
「すりゅっ♡ おほっ……おほっ！
きもちいことお……するの♡
おほっ……んおほっ♡」

「おほっ♡」

「ほおっ♡」

「ほおっ♡」

「ぐわっ♡」

「ぐわっ♡」

「ぐわっ♡」

「ぐわっ♡」

「ぐわっ♡」

「ぐわっ♡」

「ボクの私物のカップだから遠慮せずに……おしっこしていいよお♡」
「そ、そんなこと言われても……んっ!!」
「で……でませっ……んっ!!」
「それにこんなの……汚いし……んっ!!」

「妊婦に良いマタニティブレンドの紅茶飲んでいるシヤロのおしっこなら……それに飲尿は健康法のひとつでもあるし、体に悪い要素なんて……もなないよー!」
「ひっ……ひいやあ……!」

あそこをひくひくっとして生懸命震わせているけど、緊張や羞恥心が邪魔しているんだらう、出る様子がない。

膨らみ始めたお腹に膀胱も圧迫されて、でやすくなっているから、このまま待っているでもいいけど……

さすがに忍び込んでいるフルール・ド・ラパンから、早めに済ませて出たい所だから……



「あああっ！
しちやってる
私……お店でえ……」

一度放つてしまうと、もう途中で
やめるのは容易ではない。止めどなく
おしっこは放たれ続けた。

「おっとおっ！
なるべくテーブルは汚さならぬよ！
カッパはここだよお♡」
「とっ……止まらない……はらりらり……
ああ……いっぱい溜まってらるんやん！」

チリチリ

「いっぱい出るねえ……
カッパから溢れないか心配になっちやうよお♡」

「やああ……あっ……ああ」

おしっこをすっかり出し尽くした
シャロはしばらく呆けたまま、テーブルの上で
座りこけていた。

「あああ……しよっぱいけど、ハーブの香りの
生ぬるさがまた……」
ボクはしっかりとシャロ由来のお茶を堪能した。

チリチリ

アッ



—コーヒーハイテンション状態—

「ここにすればいいんねえねえ？」

「そうだよお♡でも、ちよとつと小さいから
気をつけようね」

「はあい♡それえ!!んっ……んふううう!!」

恥ずかしげもなく放尿するシヤロ。
コーヒーのちからは偉大だ。
(ちなみに適量のカフェイン摂取は
妊婦にも問題はない)

チヨロロ

「おつとおお!?だ、だめだよお……
あんまり動かないで!」

「えええとぅいいてないれすよお?
んふう……おしっこするの
気持ちいい♡」

「あっ! ああもう……」

盛大に下半身がブルブル動いて、
後始末が大変だつた……



チヨロロ

チヨロロ

「おっぱいそろそろ出ないかなあ……
もう出ても……んっ
いい頃だよねえ!
ちゅむっ……じゅるー!」

「んっ……それは
あ、赤ちゃん
産んでからじゃ……!」

「すんすん……
そんなことないと
思うよお?
だって、ミルクの
甘あい匂いが
おっぱいから漂
ってくるんだもん!」

「ふうっ……匂い、なんてえ
「シャロも残りのおっぱい
揉んでみてみなよお!」
「ん……はあっ……
ででないもん」

「気持ちよくなったら
出ないかなあ……
ほらほら……!」

「あっ……はあん♡」

最近では母乳が出てくるのを期待して
ねちっこく乳首に刺激を
与えるのがセックス時の日課になっていた。

ズッパ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

「お、おほお？これは……」
口の中に甘い液体が
じわりと染み込む。

「あああ……」
「あはあ……」
「あはあ……」

「ひゃっ！？う、うそお！！
ま、まだ赤ちゃん
産んでないのにい」

「はは、一足先にママに
なっちゃったねえ♡」

「はあああ……で、出ちやうっ
どんどん……あ、溢れてるう
す、すごい……あ、ははあ」

自分で揉んだ乳首から
どんどん溢れてくる
母乳に驚くシヤロ。

揉むたびにピュッピュッと
勢いが増しているように思える

「ああ、すごいよお……」
興奮してきたあ！
はあっ……
もういきそうだあ♡」

勃起したペニスは
射精が近くなってくる。
このまま中に出すために
腰の動きを早めることにした。

アッ

ズッ

あっ

「はああっ……ああっ♡
母乳ごくごく飲みながらの
射精最高っ♡」

「あっ……はああっ!!
あ、熱いのっ……

きてりゅう♡
おっぱい出てるのいい……
ママの悦びと女の悦び
どうじにきちやつてる
はううんっ♡」

シーツに母乳を
撒き散らしながら
シヤロも絶頂。

「ああ……はああ……
きついくらいにペニスをぎゅって
締め付けられて……
部屋中に漂う甘い
匂いに囲まれながら
射精は最高だよお♡」

「いやあ……
また新しい快感
知っちゃたよお……
はああ♡」

「思いの外シヤロも
気に入ったようだった。

ジュ〜

ドジュッ

ジュッ

ジュッ

ジュッ

ジュッ

はあっ♡

あ

「んむ……んっ
すっかりぐしょくしょくに
なっちやっただね♡」

「はあ……はうう♡」

「いっぱい出せば
出すほど、どんどん母乳って
つくられていくらしいから
毎日吸いだしてあげるね。
出産した後には
しっかり赤ちゃんに
あげられるように♡」

「ひゃうっ……そんなあ
これからずっとなおわれちゃうのお？」

「吸われるのに慣れておけば、
赤ちゃんに上手に
おっぱいあげられるかもよ♡」

「んっ……それならあ……
しかたないかもお♡」

「んっ……まだ水っぽさが
あるねえ……これから
どんどん濃くなって
くるのかなあ？
楽しみだねえ♡」

身体の明確な変化を感じて、
出産への期待はますます膨らんできました。



「ああ……早く特製ミルクテイラーが飲みたいなあ
「カップに注いでよ。ほらあ」
「やんっ、だっ……だめえ!!」

何度目かのフルール・ド・ラパンへの
エツチ目的での侵入。
店長からの信頼厚いシヤロは、
バイトを一時休業中でありながら
復帰可能なったときのため、鍵を預かっている。

「ボクのおチンポミルク
オマンコに注いであげるからあっ
それと交換ねっ♡」

「はんっ……あっ!
お店でこんなことお……もういやあ」

「んふっ……何度もこっさりしてきてたでしよっ?
大丈夫だよっ!」
「ひゃうんっ……ああ……」



「赤ちゃん起きてたんだねえ
エッチなママのこと、どう思ってるかなあ」

「そ、そんなことお……い、いわないでえ♡」

「しっかり赤ちゃんに言ったこと伝わってるよね♡
オマンコがヒクヒクって、今もまだ痙攣してるよ♡」

「うっ……はあ、あっ……」

「母乳もいっぱい注げたね♡
できたらなんて言うんだっけ？」

「あっ……ご、ごゆっくりお召し上がり
くださあ……い♡」

「はあい♡んっ！」

日に日に濃くなるシャロの母乳が
たっぷり入ったミルクティーを
幸せいっぱい堪能することができた。



あ、

アッ
ッ
ッ

ド
ロ
ッ

あ
っ
っ

あ
っ
っ

陣痛が始まって破水が起こって
からもうどれくらい経っただろうか……
「ひっ……ひん……ふうふう……」
「ああ、もうすぐ赤ちゃんが生まれてくるんだね
すごく楽しみだよ」

子宮が収縮し、赤ちゃんを押し出そうとしている
「ああ……こんなところでえ……ふうう
赤ちゃん……っ産むなんてえ……」
「ボクたちの出会いの場所だもん、
お似合いのところだろう？」

「んっ……ふくっ……あああっ!!」
陣痛の間隔が次第に短くなり
痛みは増していくようだ。



「ああ、もう我慢ができないよっ」

おもわず羊水を舐めとりながら、
膣を開いて、中の様子を確認してしまう。

「はああっ！だめえ……」

「早く出ておいでえパパもママも
キミに逢えるの楽しみに
してるんだからね♥」

そんなことをしていたら、次第に
頭が産道を通ってぽっこりと恥丘を
膨らまし押し上げはじめた。

「んっ！！ひっひっ……ふうううっ！

はあっ！！ああっ！！お腹の中……
ごりごりされてるう♥」

ぷくつと膨らんでいく恥丘

苦しさをにじませながらも
感じちやっっているシャロだった。



「ああ……見え隠れしてた赤ちゃんの頭が
もう見えっぱなしになってるよお」

「はあっ……あとちよつとお……なんだあ♡」

「しっかりと受け止めてあげるから、
遠慮せず思いつきり出しちゃおうね♡」

ぽっこり赤ちゃんの頭で膨らんだ恥丘
お尻の穴まで広がってきた。

「ああっ……はっ！出てきちゃうっ……ふうっ！！」

ぐぐぐと、恥丘はさらに盛り上がり、
膣口は内側から押し広げられていく。
赤ちゃんの頭はどんどん外へと
その姿を表していった。



「おおおっ……で、でるう……広がっちゃ……ほおおっ♡」
「こっそりいじつていた乳首からの母乳と一緒に
赤ちゃんの頭がぽこんつと飛び出した。
「おお、すごいよっ……」

「はああンツ♡おっぱいいじつちやダメえ
赤ちゃんにあげる分がなくなっちゃ……
イクウ……赤ちゃんにこりこり産道こすられて
おっぱいいじられてえっ♡」

ズン!

ズン!

「んんせら、ツヤロにとっては、出産は
気持ち良い思い出になってくれそうだね♡」

「はひらら……苦しんだけど
気持ちいいのお♡癖になっちゃいらそう……」

ズン!

ズン!

ズン!



「見えるかい？ボクたちの赤ちゃん♡」
「あはあ……私たちの赤ちゃんっ出てきてくれたあ♡」
頭が出てきてからは身体が出てくるのはあつという間だった。
たちまちするりとでてきたもので、
ボクはあわてて、手でしっっかりと包み込んだ。

「あつ……」
その存在を知らせるかのように元気に産声を上げ始める。
まるで、ボクたち3人になった家族の
新しい門出を告げるかのように……

あはっ♡

トロっ

ハッ

ハッ

トロっ

ほむ

あ





桐間紗路の妊娠・出産



桐間紗路の妊娠・出産













































































